

抄 錄

○吸入ニ依ル鼠ノ肺炎ノ實驗的研究. E. G. Stillman & A. Brauch, Experimental production of pneumococcus pneumoma in mice by the inhalation- method. (J. of Exp. Med. Vol. XL. No. 16, 1924.)

著者等ハ先ニ毒性強キ肺炎菌ヲ二十日鼠ニ吸入セシムルニ、健康ナルモノニテハ短時間内ニ該菌ハ肺臟ヨリ消失シ、全身傳染ヲ見ル事ハ稀有ニ屬ス。然レドモ豫メ酒精中毒(生理的食鹽水中ニ10%ノ比ニ純酒精ヲ含有セルモノヲ1.5 c.c. 腹腔内注入)ヲ惹起セシメタル二十日鼠ニ同一方法ヲ行フ際ニハ、肺炎菌ハ長ク肺臟中ニ存在シ屢々敗血症ヲ以テ死ノ轉歸ヲ取ル事アリ。更ニ毒性強キ肺炎菌ノ反覆吸入ニ依リテ高度ノ免疫ヲ惹起セシメ得レドモ、死滅セル同一菌ノ反覆注入ハ僅ニ免疫性ヲ呈スノミト。以上ノ成績ヨリ引イテ本論文ニ於テハ次ノ諸實驗ヲ企テタリ。(1)酒精中毒ノミチ起サシメタルモノ、(2)酒精中毒時ニ肺炎菌ヲ吸入、(3)部分免疫鼠(partially immune mice)ノ酒精中毒時ノ肺炎菌吸入。

第三ハ總テ豫メ肺炎菌吸入ニヨリテ免疫セルモノノミチ用キタルモノニシテ次ノ三部ニ分タル。(a)生活力アル肺炎菌數回反覆吸入後ニ回復セシ鼠、(b)前者ト同一ナルモ、熱ヲ以テ死滅セシメタル肺炎菌ヲ使用セルモノ、(c)酒精中毒時ニ一乃至二回生活力アル肺炎菌ヲ吸入セシメタル後恢復セル鼠。

更ニ或ル一型ノ肺炎菌ヲ以テ免疫セシメタル二十日鼠ヲ酒精中毒ヲ惹起セシメ、又ハソノ儘ニ他型ノ肺炎菌ヲ以テ處置セシモノモアリ。

結論トシテ(1)非免疫性二十日鼠ノ酒精中毒ヲ惹起シ肺炎菌吸入ニヨリ敗血症ヲ起シセルモノニ於テハ肺炎ニ傳染ニ因ル病竈ヲ認ム事稀有ナリ。(2)部分免疫鼠ノ酒精中毒時ニ生活力アル肺炎菌ヲ吸入セシメタルモノニ於テハ肺炎菌性全葉肺炎(pneumococcus lobar pneumonia)ヲ屢々惹起スルモノナリ。(3)肺炎菌ノ一型ヲ以テ比較免疫(relatively immune)ノ鼠ハ他型ノ肺炎菌ノ吸入ニヨリ、全葉肺炎ヲ屢々惹起スルモノナリ。(病、伊藤抄)

○副腎ノ胸腺ニ對スル影響ニ就テ. H. L. Jaffe, The influence of the suprarenal gland on the thymus. (II) Direct Evidence of regeneration of the involuted thymus followign double suprarenalectomy in the rat. (J. of Exp. Med. Vol. XL. No. 5, 1924.)

著者ハ13匹ノ老鼠ニ就テ、兩側副腎摘出(二次的ニ)ヲナシタル際、退行性變性ニ陥リツツアル胸腺ノ再生現象ヲ認メタリ。コレヨリ先、著者ハ胸腺ト副腎トノ密接ナル關係ヲ記載シ、66匹ノ兩側副腎別出鼠竝ニ21匹ノ手術ヲ施サザル對照動物ヨリ次ノ結論ニ到達セリ。則チ兩側副腎別出後3乃至5週ヲ經過セル鼠ニ於テハ胸腺ノ増大ヲ來セリト。

本著ニ於テ使用鼠ノ剖檢時ノ年齡ハ生後282日ヨリ427日ヲ算セリ。普通健康ナル鼠ノ胸腺ハ生後80日乃至90日ニ初メテ退行性變性ヲ起スモノナク、「エーテル」麻醉ノ下ニ以上13例ノ鼠ノ胸腺ノ一部切除ヲ行ヒ顯鏡スルニ、總テ種々ナル程度ノ退行變性ヲ見タリ。然ルニ兩側副腎別出後ノ遺殘副腎ハ、總テ明カニ二次的肥大竝ニ再生現象ヲ呈セルヲ見タリ。該再生現象ハ動物ノ高度ノ鼻加答兒、慢性肺炎患、副腎缺損ニヨル死亡ノ際、又ハ體重減量等ヲ起シタルモノニモ何等影響セラレズ發現スルヲ認メタリ。更ニ胸腺ノ一部切除ノ際遺殘胸腺ニ二次的ニ代償性肥大ヲ來サテ確カニ爲メ、術後2週間ノ後副腎ヲ別出スル事ナク、遺殘胸腺ヲ檢セルニ手術前後ニ

於ケル胸腺ハ何等ノ差異ヲ認メザリキ。Addison 氏病竝ニ Basedow 氏病ノ際ニ退行變性セル胸腺ニ再生現象ノ起ルハ、一般ニ認メラル所ニシテソノ際他ニ強度ノ羸瘦又ハ慢性疾患ノ存在モ影響セザルモノナリ。著者ハ更ニ淋巴性體質ノ際ノ胸腺肥大及ビ上記ニ疾患ノ際ノ胸腺再生ト本實驗ニ因ル胸腺再生トハ同シク兩腺間ニ於ケル同一障害ニヨリ來ルモノナリト信ゼリ。

結論 (1) 老鼠ニ於ケル退行變性ニ陥レル胸腺ノ再生ハ兩側副腎別出後常ニ現ハルルモノナリ。(2) 胸腺ノ一部分切除ハ退行變性ニ陥レル胸腺ニ二次的ニ代償性肥大ヲ伴フモノナラズ。(3) 兩側副腎別出後ノ胸腺再生ハ殆ド總テノ老鼠ニ於テ2週間ニ完成シソノ現象ハ胸腺ノ髓質ニ初マルモノナルベシトセリ。(病, 伊藤抄)

○種々ナル「ヘモグロビン」ノ酸素及ビ一酸化炭素ニ對スル比較的親和力、竝ニ其等「スペクトルム」間ノ關係ニ就テ。アンソン, パールクロフト, ミルスキー及ビ生沼曹六, (Proceedings of The Royal Society. Vol B 97 No. B, 1924.)

1. 種類ヲ異ニスル動物ノ Hb ハ各其ノ「スペクトルム」ヲ異ニシ、O₂ 及ビ Co ニ對スル其等 Hb ノ親和力ハ又同シカラズシテ各異ナル「スペクトルム」ヲ示シ L 帶ノ位置ニ特種的ノ差異ヲ認メシムルモノナリ。ハルトリツジ氏ノ「スペクトロスコープ」ハ、O₂-Hb ト Co-Hb トノ混在セル時其ノ量ノ割合ヲ簡單ニ測定シ得ル様ニ仕組ミタルモノニシテ、O₂-Hb ノ O₂ ガ Co ニテ置換サルニ從ヒテ紫端ニ移動スル L 帶ノ位置ヲ波長ニテ器械ノ目盛上ニ讀取リ得ルモノナリ。各種動物ニ就キ得ラレタル Calibration curve ハ等邊雙曲線ヲナシ、其ノ求メ方ハ次ノ如シ。

(イ) 人間ノ血液ヲ 50 倍ニ稀釋シタル色ノ強サヲ標準トナシ常ニ之ト同濃度ニ當該動物ノ血液ヲ稀釋ス之テ P 液トス。(ロ) 人間ノ血液竝 P 液ノ O₂-Hb 及ビ Co-Hb ノ吸收帶ノ位置ヲ定ム。(ハ) P 液ノ一部ヲ採リ其ヲ二倍ニ稀釋ス、之ヲ Q 液トス。Q 液ヲ二部ニ分チ、其ノ内ノ一部ヲ Co ニテ飽和シ之ヲ R 液トス。他ノ一部ヲ S 液トス。一ツノ容器 A ニ Q 液ヲ、他ノ容器 B ニ R 液ヲ入レ、二ツヲ重ネ光ノ通路ニ置ク、而シテ 50% O₂-Hb ト 50% Co-Hb 溶液ノ混合液ニ就キ目盛ヲ讀ム。(ニ) R 液竝 S 液ヲ各二倍ニ稀釋シ、R' 液竝 S' 液ヲ作ル。R 液ニ S' 液ヲ重ヌル事ニヨリ、66.6% Co-Hb 飽和溶液ノ L 帶ノ波長ヲ、S 液ニ R' 液ヲ重ヌル事ニヨリ、33.3% Co-Hb 飽和溶液ノ其ヲ求メ得ラルベシ。

2. 種々ナル多數ノ哺乳動物ニ於テ次ノ如キ關係アリ。O₂-Hb 及ビ Co-Hb ノ L 帶ノ極大強度ノ位置ヲ夫々 A 及ビ B トシ、

$$\frac{[\text{HbCo}][\text{O}_2]}{[\text{HbO}_2][\text{Co}]} = K \text{ トスレバ (K ハ平衡恒數)}$$

Log K=0.05 (A-B) ナリ。(但シ A 及ビ B ハ A. U. 單位ニテ表サルモノトス)

3. 以上ノ關係ハ Hb ヲ再結晶シテ同様處理シタル場合ニモ成立ス。

4. 變化ノ原因ハ「ヘマチン」ヨリ寧分子内ニ於ケル「グロビン」ノ特性ニ基クモノナリ。

5. (2) ニ於ケル Log K ハ反應ニ與ル遊離「エネルギー」變化ノ尺度ナリ。(A-B) ノ價ハ我々ノ觀察セシ動物ニ於テハ 48—56 A. U. 範圍内ヲ動搖セリ。個體ニ於ケル變化ハ同種族間ニ於テ著シキモノアリ。

6. ブ라운竝ホルノ血液ニ及ボス温度ノ影響ニ就テ觀察シタルト同シク、温度 T₁ 度ニ於テ半飽和サレタル Hb 溶液中ノ O₂ ノ濃度ヲ CT₁ トシ温度 T₂ 度ニ於ケル濃度ヲ CT₂ トシ AT₁ 及ビ AT₂ ヲ L 帶ノ極大強度ノ位置トスレバ、

$$\log \frac{1}{\text{CT}_1} - \log \frac{1}{\text{CT}_2} = 0.049 (\text{AT}_1 - \text{AT}_2) \text{ ナリ。 (生, 奥山抄)}$$

○血管運動中樞—脊髓ノ血管反射及ビ其ニ及ス「ストリヒニン」ノ影響。 Langley, (The Journal of Physiology, Vol LIX, 19 4.)

Langley ハ「クラーレ」ヲ與ヘタル脊椎猫(腦髓ヲ破碎シ兩側ノ迷走神經ヲ切斷シ頸部ニテ脊髓ヲ横斷セシモノ)ニ就キ次ノ實驗成績ヲ得タリ。

(1) 四肢若クハ軀幹ノ神經ノ中樞端ヲ刺戟スル事ニヨリ、1—4 mm. Hgノ輕度ノ血壓上昇ヲ來ス。場合ニヨリテハ稍々其ヨリ大ナリ。腸ヲ除去セザル場合ニハ除去シタル場合ヨリ確實ナリ。飢餓ノ場合ニハ然ラザル時ヨリ不確實ナリ。正常體ニ於テ身體ノ求心性ノ神經ハ脊髓反射トシテ輕度ノ血壓亢進ヲ起サシメ得。

(2) セリントンニヨリ觀察サレタ如ク、内臟神經ノ中樞端ヲ刺戟スル事ニヨリ常ニ血壓上昇ヲ認ム、本實驗ニ於テ血壓上昇ハ 8 mm. Hg ヨリ 24 mm. Hg (一度ハ 33 mm. Hg) ニ達シタリ。

(3) 後肢ノ神經ノ中樞端ノ刺戟ハ時々不分明ナル發赤ニ次キ、不分明ナル蒼白ヲ來ス。此ノ變化ハ後脚ニ觀察シ得ベク前脚ニ於テハ見難シ。腹部臟器ヲ温カナル Ringer 氏液中ニ入ル時ニハ後肢ノ神經ハ長キ小腸ニ輕微ナル蒼白及ビ他ノ影響ヲ起ス。上膊神經ハ胃及ビ十二指腸ニ蒼白ヲ起サシム。即チ反射ノ結果ハ一定領域ニ局限サレテ起レ共局所循環ニ重大視サル程ニ局限サレテ起ラズ。

(4) 脊髓神經ノ亢奮性が非常ニ低下セザル凡テノ場合ニハ、「ストリヒニン」ノ注射後血壓ノ反射的亢進ガ來ル亢進ノ程度ハ「ストリヒニン」ノ量ニ關ス。多クノ實驗ハタテ、食ヲ與ヘラレタル猫ニ就テ行ハレタリ。其ノ結果ハ次ノ如シ。極輕微ナル血壓上昇ヲ起ス「ストリヒニン」ノ量モ坐骨神經ノ刺戟ニヨリテハ、20—40 mm. Hg ニ達スル血壓上昇ヲ起ス。大ナル血壓上昇ヲ起スニ足ラザル「ストリヒニン」ノ量ハ一分或ハ其レ以上經過シタル後ニ坐骨神經ノ刺戟、若クハ上膊神經ノ刺戟ヲシテ血壓ノ大亢進ヲ起サシム。何レノ場合ニ於テモ刺戟ノ持續ト共ニ血壓ノ上昇ハ減少セリ。血壓ノ最大上昇ヲ起スガ如キ「ストリヒニン」ノ量ハ身體ノ神經若クハ内臟ノ神經ヲシテ「ストリヒニン」ノ與ヘラレザル前ノ血壓ノ約二倍ニ上昇セシム。更ニ「ストリヒニン」ノ增量ハ反射的亢進ヲ減少ス、時ニハ全ク阻止ス。

(5) 「ストリヒニン」ノ少量ハ脚ノ色ノ變化ヲ反射的ニ起ス。飢餓ノ動物ニ於テ脚全體ノ蒼白ハ著明ナルモノナリ。併シ時ニ最初ニ發赤ノアル事アリ。此等ノ變化ハ坐骨神經ノ刺戟サレタルト反對側ノ後脚ニ最も強シ。盛ナル消化時ニ於ケル動物ニ於テハ最初ノ發赤ハヨリ著明ニシテ、ヨリ常在性ナリ。時々之ハ血壓亢進期間全體ヲ通ジテ持續セリ、而シテ其ノ血壓ノ後、短時間ノ内ニ消失シ始ムモノナリ。此ノ發赤ハ坐骨神經ノ刺戟サレタルト反對側ニ於ケル後脚ニ最も強ク、ヨリ長ク持續セリ。而シテ凡テノ場合其ノ後ニ蒼白ヲ來ス。同側ノ脚ニ於テハ刺戟ハ遲延性ノ僅ナル發赤ヲ最初ニ起シ、其ノ後ニ最大ノ蒼白ニ移行ス。(勿論此ノ場合、前脚神經ハ坐骨神經ト同ジク切斷サレタリト雖モ)

(6) 「ストリヒニン」投與後ノ血壓ノ著シキ反射的亢進ハ露出サレタル小腸全體ノ蒼白ヲ同伴シタル共露出ノ一定後ニハ大ナル自然的ノ血壓亢進ガ識別シ得ベキ小腸ノ蒼白ヲ伴ハズシテ起レリ。内臟運動ニ關スル反射ハ極ク僅ニ「ストリヒニン」ヨリ影響サレタリ。

(7) 「ストリヒニン」ノ前後ニ於テ毛及ビ汗腺ニ四脚ノ神經或ハ内臟神經ノ刺戟ニヨリ如何ナル反射的ノ影響モ起ラザリキ。只稀ニ上方ノ腰部神經ハ局所的ニ立モチ起セリ。恐ク特別ナル實驗ニヨル「アスフイキシニー」ノ爲メ脊髓中樞ノ亢奮ノ増加ヲ來セシモノナラン。

(8) 注射サレタル少量ノ「ストリヒニン」ノ後ニ得ラレタル血壓ノ大ナル反射的亢進ヨリ、増進セル脊髓ノ亢奮

ノ病的状態ニ於テハ脊髄ノ血管中樞ノ必要ナル事ヲ知ル。又脊髄神經切斷後一週或ハ其レ以上ニ於テ起ル或ル自律脊髄中樞ノ増加シタル反應ハ其等ノ内ニ終ハレル下降性神經纖維ノ變性ニヨリ生シタル神經細胞ニ於ケル亢奮性ノ増加ニ因ル事ヲ暗示ス。ト (生, 奥山抄)

○視神經萎縮ニ對スル手術の影響アリヤ。 Deuschmann, Gibt es eine operative Beeinflussung der Sehnerven atrophie? (Zeitschrift f. Augenh. Bd. 53, 1924.)

1924年1月號ニ於テ Friede 氏ハ此ノ問題ニツキテ報告セリ。氏ハ眼壓ヲ降下セシムル手術ハ網膜ノ充血ヲ招來シ、延イテ網膜ノ管養ヲ佳良ニシテ光覺(視力)ノ上ニ定量的ニ好果ヲ與ヘ得トノ考ナリ。即チ氏ハ前房穿刺ヲ反覆舉行シ、九箇月間持續セル光覺ノ上昇ヲ得。又他ノ例ニ於テモ同様ニ左右眼ノ光覺上昇ヲ認メタリ。但シ或例ニ於テハ二週間左右眼ヲ減壓セシメタルニ拘ハラズ、全ク效果ヲ見ザリト云フ。Friede ハ其論文中ニ眼底ノ所見ノ變化ヲ記載セズサレドモ氏ハ Behr (1912) ガ穿孔性眼外傷ニ見タル鬱血乳頭ノ報告ニ基礎ヲオケルモノナルベシ。Behr ハコノ外傷例ニ見タル鬱血乳頭ニツイテ説明シテ曰ク、此際ノ鬱血乳頭ノ成因ニハ二ツノ可能アリ。一ハ純然タル器械の成因ニシテ、眼壓降下ニヨル網膜ノ充血ニシテ、他ノ一ハ炎症性中毒性ノ成因ナリ。然レモ余ノ考ニテハ此際ノスペテノ狀況及ビ標本ニ見ル網膜、脈絡膜ノ靜脈、動脈ノ充血ヨリ推考シテ、恐ラク器械の成因ガ正シカラント述ベタリ。

余ハ既ニ 1915 年之ニ就テ Behr ノ說ヲ治療的ニ應用シテ、ソノ說ノ當否ヲ決スルヲ得ベシト論セリ。

今日用ヒラレル手術中ニテハ鞏膜切開及ビ圓鋸術ハ最も長時間ニ亙リテ、眼壓ヲ降下セシムルヲ得。余ハ視神經萎縮ニ就テ次ノ實驗ヲ行ヘリ。

(I) 鞏膜切開(無虹彩切除)六眼、手術直後ニ於テハ多少ノ網膜血管ノ充血ヲ見ルコトアルモ、數分ニシテ手術前ト同様トナリ。何等變化ヲ見ズ、視力モ上昇セズ。シカルニ眼壓ハ手術前ニ比シテ著シク下降セリ。

(II) Elliot 氏圓鋸術。視神經萎縮ノ外ニ色素性網膜炎及ビ「キニン」中毒ト思ハレル視神經萎縮ニモ試ミタレドモ、眼壓ハ永ク下降セルニカハラズ、充血ヲ見ズ。又視力ノ上ニモ何等效果ヲ見ザリキ。

以上ノ余ノ成績ヲ見ルニ、圓鋸術ノ一例ニ見タルガ如ク、手術後 17 日ヲ經テ、尙ホ眼壓 8 mm ニアルガ如キ長時間日眼壓ノ下降セル場合ニ於テスラ、眼底ニモ視力ニモ何等ノ變化ヲ見ズ。タマニ極メテ一過性ノ充血ヲ見ルコトアルモ、直チニ以前ノ状態ニ復ス。

萎縮セル視神經ナルガ故ニ眼壓降下ノ手術ニヨリテモ充血ヲ來サズトノ說ハ取ルニタラズ。何トナレバ萎縮セル視神經ニ於テ、腦腫瘍ノ時ニ鬱血乳頭ノアラハルルコトハ既ニ症例アリ。シカモ線内障眼又ハ殆ド正常ナル眼ニ眼壓降下ノ手術ヲナシテモ眼底所見ニ變化ナシ。

Meller 氏ハ Lagrange 氏手術又ハ Elliot 氏手術後ノ線内障眼ニツイテ、精密ニ報告セシモ眼底所見ニ於テ充血ヲ認メシコトヲ記載セズ。

余ハ正常ナル血管ニテモ、眼壓降下ニ對シテ一時性ノ徑口變化以上ニ強キ影響ヲ及ボスモノトハ考フルヲ得ズ。要スルニ、余ノ實驗ノ結果ハ (1) 手術の眼内壓降下ハ、一過性ノ血管擴張ヲ除ク外何等變化ヲ招クコトナシ。

(2) カカル手術ニヨリテハ視神經萎縮症及ビ色素性網膜炎ニ對シテ、何等治療の效果ヲ認メズ。(眼, 大森抄)

○驅敵療法ニ關スル二三ノ注意事項. Carl Bruhns, Some questions in regard to the treatment of syphilis. (The urologic. and cutaneous review. Februar, 1925.)

(1) 「サルワルサン」製劑ト種々ノ水銀製劑トノ併用療法ニ就キテ、略々同様ノ初期敵毒ノ症狀ヲ有スル 660 人ノ患者ニ於テ、著者ノ使用セル方法ト Linser 氏法トヲ實驗的ニ比較セルニ、僅少ノ例外ヲ除キテハ大ニ差ハナカシキ。副作用ニ就キテ皮膚炎及ビ高度ノ「サルワルサン」黒皮症ニ就キテ述べ、次ニ手及ビ足ニ砒素角化症ヲ發生セル患者ノ四肢軀幹ニ現ハレタル Lichen ruber planus 様ノ發疹ハ、砒素療法中止後自然治癒ヲ來セルコトト、全經過中癢痒ヲ缺知セル點ニヨリ、眞性苔癬ト區別シ「サルワルサン」苔癬ノ一ツト見ルテ適當トスト。又著者ハ小兒ニ於ケル出血性腸炎ノ一例ヲ實驗セリ。

(2) 「ビスムート」ニ就キテ、著者ハ主ニ「ビスモグノール」ヲ使用シ常ニ筋肉内ニ注射セリ。何トナレバ「ビスムート」ノ作用ハ其筋肉内ニ於ケル停滯作用ニ俟ツコト多キ故ナリ。更ニ「ビスムート」ハ「サルワルサン」ニハ劣ルモ水銀ニハ優ルト。其合併症トシテハ輕度ノ發疹、口内炎及ビ稀有ナル腎臟障害ヲ除キテハ重篤ナルモノヲ見ズ。筋肉内ニ注射セラレタル「ビスムート」ガ如何ナル程度ニ脊髓液中ニ移行スルカトイフニ、著者ノ助手ノ實驗ニヨレバ陰性ニ終レリ。

(3) 「サルワルサン」ノ靜脈内注射後ニ於テ砒素ガ脊髓液中ニ現ハレルヤ否ヤノ問題ニ就キテハ、諸説區々ナルモ著者等ノ研究ニヨレバ、脊髓液内ニ砒素ヲ證明シタル例ハ極メテ僅少ナリキ。靜脈内注射法ニヨリ脊髓液ヲ恢復シ能ハザル時ハ、脊髓内注射法ヲ施スベシト云フ。

(4) 敵毒ニ對スル豫防的處置トシテ陰部ニ疑ハシキ傷ガ現ハルルヤ否ヤ驅敵療法ヲ行フモノト、確實ナル診斷ヲ待テテ驅敵療法ヲ始ムルモノトノ二説アリ。著者ハ後説ヲ主張ス。何トナレバ疑ハシキ傷ニハ「ヘルペス」、軟性下疳及ビ無害ナル糜爛面モ含マルル故ナリ。併シ結婚セル夫婦ノ一人ガ其相手以外ニ由リ傳染ヲ受ケル場合ノ如キハ、其相手ニ對シテ直チニ豫防注射ヲ施スベシ。(皮、荒田抄)

○皮膚ニ於ケル石灰沈着問題ニ就テ. Guhrauer, Beitrag zur Frage der Kalkansammlungen in der Haut. (Dermat. Wochenschr. Bd. 80 No. 4, 1925.)

皮膚ニ於ケル石灰沈着ハ内臟器官ノ石灰化ノ部分現象トシテ、又ハ單獨ノ現象トシテ來タル。前者ニ於テハ新カル所見ハ何等注目スベキニ非ザルモ、單獨ニ皮膚ニ石灰沈着ヲ來タス時ハ興味アリ。Hoffmann 氏ハ單獨ニ起ル石灰化ハ内分沁障ト關係ヲ有セル事ヲ述べタリ。著者ハ肺結核ニ罹レル 45 歳ノ一婦人ノ左側拇指ニ有痛性結節ヲ生シタル例ヲ擧ゲ、其甲状腺ハ著シク小ナリキ。該拇指ノ皮膚ハ鞏皮症様ニ變化シ兩手ハ Raynaud 氏病ノ如ク屢々蒼白トナリ知覺神經障ヲ來タスコトアリテ、指ハ「チアノーゼ」ヲ呈シ寒冷ナリ。左側拇指ニ石ノ如キ硬度ヲ有スル數結節アリテ一部ハ移動性他ハ下層ト密着セリ。尙ホ一二ノ瘻孔アリテ時々粥狀物ヲ排泄セリ。此物質ハ鹽酸ヲ加フルコトニヨリ泡ヲ發シテ溶解ス。X線ニテ結節ニ相當セル陰影ヲ認メ、切片中ニ石灰ヲ證明セリ。血液中ノ石灰量ハ尋常ナリキ。尙ホ此ノ主症候以外ニ文獻ニヨレバ皮膚ニ於ケル粘液滯溜、或ハ全身ノ脂肪營養障ヲ見タルモノアリ。且患者全身ノ羸瘦ヲ來タセル例ニ於テハ脂肪新陳代謝ノ障ヲ考フベキモノナラン此等凡テノ症狀ハ内分沁障ヲ示セルモノニシテソノ最モ主ナル原因ハ甲状腺ナルベシ。是ニ由テ鞏皮症ト石灰化トノ關係ガ明カトナルノミナラズ、粘液水腫或ハ脂肪營養障トノ關係モ想像シ得ベシ。尙ホ著者ノ例ハ此疾患前ニ月經閉止ヲ起セルガ故ニ卵巢ノ機能障ヲ考ヘラル。卵巢ト甲状腺トノ關係又ハ卵巢機能ノ石灰物質代謝ニ對スル意義(骨軟化症ノ如キ)ヲ考察スルナラバ自ラ其關係ヲ知リ得ベシト云フ。(皮、藤原抄)